

赤城山の“すその”で暮らそう！ 前橋移住を考えるフリーペーパー

SUSONO

vol.1

[創刊号]

移住は、人生そのもの。



住み慣れたまちから、
生まれ育ったまちから、
新しい土地へ移り住む。

移住は、人生そのものだ。

人生は、十人十色。

進学、就職、転職、結婚。

明るい理由、暗い理由、

楽しい理由、悲しい理由。

移住の理由も、十人十色。

前橋に縁のあった

みなさんにとって、

このまちで暮らす毎日が、

楽しくて、面白くて、幸せな

日々になりますように。

あなたと前橋移住を考える

「susono」創刊です！



“おいしいとこどり生活”のすすめ

初めての取材先として訪ねたのは、前橋市粕川町深津へ移住して5年となる阿部玲奈さん（以下、玲奈さん）。東京出身の玲奈さんは、同町出身の夫・阿部剛志さんと縁あって移り住むことになったこのまちで、東京へ通勤する夫と4人の男の子たちに囲まれてのんびりと暮らしている。編集部は、前橋の中心市街地から玲奈さん一家の住む粕川地区へと向かった。

阿部さん一家がこの地を選ぶまで

ミニバンに揺られながら前橋と茨城を結ぶ国道50号を東へ走り、途中、粕川地区へ向けて北上。「赤城山の裾野は、富士山の次に広いらしい」なんていうほのほのとした会話をしていたら、あつという間に玲奈さんの待つお宅に到着した。移動時間は、およそ30分。市街地と粕川地区が案外近いことに感心していると、「きゃははは！」とこどもたちの無邪気な声があたりに響き渡った。

「移住してきた当初は、93歳のおおばあちゃんとお丸一年住んでいました。その後、大おばあちゃんは亡くなってしまいました。新しい世代の私たちがこの家を引き継ぎせてもらいました」

自宅の目の前は、畑と牛舎が並ぶのどかな風景。4人兄弟の末っ子・和志郎くんを抱っこする玲奈さんに、牛舎を案内してもらった。周囲には人工的な音はほとんどなく、鳥の鳴き声や木々の揺れる音が心地よい。こうした静かな住環境を求めてやってきたのか、築10年から20年ほどの戸建て住宅も多く立ち並んでいた。

「こちらに引っ越してくる前は、東京の上野のあたりに住んでいました。まちの中だったからほとんど園庭もないような幼稚園ばかりでした。だったら、公園を連れ歩いて遊んでいるほうがいいなと思っていましたよ（笑）。さすがに、最後の1、2年は幼稚園に行った方がいいんじゃないの？といくつかの園を回ってはみたものの、長男がとにかく嫌がって。」

そんなとき、前橋の「木の実幼稚園」という幼稚園が森を持っていて、園を一般開放しているという情報を親戚から聞きつけたんです。それで、私の興味本意で訪れてみたところ、一緒に連れて行った長男が森の中へひとり入って行って。その姿に私たち

は感動して、やっぱり自然の中で子育てしたほうがいいよね！という話になり、それから5ヶ月後には入園という（笑）。私も夫も、心を放って遊んでほしかったですし、単純に夫の実家というのも安心でした」

阿部家では、耕志郎くん（10）、結志郎くん（6）、杜志郎くん（4）、そして和志郎くん（1）という4人の男の子が、粕川の自然の中ですくすくと育っている。取材を進める間にも、子どもたちはあちこち走り回っては、ありあまる元気を振りまいていた。

自然とまちとの距離感が絶妙

「この地元の人からは、東京への憧れが強いのか、『東京の人じゃ、こんなところにいたくないでしょ？』なんて言われることが多いんです。ですが、私にとっては宝の山。手に届く範囲に自然があつて、暮らしに必要なまちも近い。自然とまちのバランスが、本当に絶妙だなと思っていて。夫と私は、自転車にキャンプ道具を乗せて旅をしてしまいうくらい、もともとアウトドア好きなんです。若い時は、山の中に住むのが夢でした。一方で現実には、都心に働きに出るために満員電車に乗る毎日。それを何十年も続けるのはイヤだよねと夫婦で話していた。東京を出ることは、地元とはいえずと考えるようになりました。仕事との兼ね合いなどもあったので、生まれ育った国立や、鎌倉、奥多摩のほうも候補でしたが、やっぱり畑もやりたかったし、こどもが自由に外に出られるような生活が良かったんです。実際、東京で暮らしている時は、ドアを開けるとすぐさま車の往來の激しい道路というような環境でした。そうこう考えているうちに、夫の実家であるここが移住先として浮上ってきました。実家ということ、事前に何回か行って土地の雰囲気やなんとなく感じておけたのも大きかったですかね」

ここで、自ら作っているという梅ジュースに氷を入れて出してくれた玲奈さん。さらに、玲奈さんのお義父さんがスイカを持ってきてくれた。風通しのいい古民家とはいえ、厳しい真夏の暑さの中、冷えたジュースと真っ赤なスイカが体に染み渡った。（その直後、口をつける前のおいしそうなおジュースに、和志郎くんが自分が食べていた海苔を入れてしまったのはここだけの話）

移住は、人生そのもの。



末っ子の四男・和志郎くん(1)を終始そばで見守る玲奈さん。ご自宅周辺を散策した際に訪れた牛舎で、「動物に小さい頃から触れておくことは、こどもの感受性や健康面にとって良い影響があるという情報をテレビで目にした事があり、気になっていました！」と話しながら、和志郎くんと牛を触れあわせていた。

玲奈さんのおすすめ

政次郎のパン

前橋市六供町 1221-2



前橋に来て「パン飢え」を起こしたという玲奈さんが紹介してくださったのは、1999年創業、地元で親しまれ続ける「政次郎のパン」です。小さめの店内には、種類に合わせてライ麦の比率を考えた本格的なドイツパンや、箱根の湧き水で仕込んだ人気の食パンなど、子どもからコアなファンまでをも唸らせるパンが所狭しと並びます。オーナーの大島政次郎さんも根っからのパン好きで、常に全国の勉強会を飛び回り、新しい製法や多様なパンの食べ方を研究し続けているそうです。

森のhahako園

“みんなでみんなのこどもを育てる暮らし”を目指している、母子主体の“森の子育て広場”。「せっかく群馬に来たので、自然の中で子育てがしたい」という思いから、玲奈さんが前橋移住後に立ち上げた。「おにぎりとお味噌汁の具になりそうなものを持ち寄って、同じ釜の飯を食べる。ただ集まって話すだけ」というシンプルな集まりだ。主な活動場所は、粕川町中之沢のサンデンフォレスト。山の中の見晴らしの良い場所にあるため、自分たちの暮らすまちを見渡しなが、子供たちを自由に遊ばせることができる。ホームページやFacebook ページでも情報発信中！



「実際に暮らし始めてみて思ったのは、みんなの行動範囲が広いなあということ。都内に住んでいた頃は、友人との予定やお買い物を徒歩圏内で済ませていました。しかし、このまちでは30〜40分の車移動が当たり前前という感じ。自分にとっての当然の行動範囲というのを見いだしていくのが難しかった。

一方で、それゆえの楽しみもありましたよ。「森のhahako園」という、子育て世代に向けた遊びの場を立ち上げたとき、粕川地区だけでなく、30分以上離れた市内外のエリアからも参加者が駆けつけてくれて」

コミュニティをつくる活動や、お義父さんから教わった伝統の技術や遊びをシェアする教室の立ち上げなど、玲奈さんは新しいまちでも楽しく生き生きと暮らしている。東京から前橋に生活を移したことで、家族の中でいろいろの変化があったそう。

「前橋に来る前は、夫は帰ってきてもずっと仕事モードでした。なかなか太陽も浴びられないようなところに住んでいたというのがある。夫にとっては体も心も休まらない日々だったと思います。今も新幹線通勤をしているので帰ってくるのは遅いけれど、オフの時にはしっかり休めているようです。それに、子どもは自由に走り回りたいですし、好きに叫びたい。夫のこと、子どものこと、どれをとっても、心のリラックas度が全然違いますね。

ここは完全な山の中とは違って、出ようと思えばすぐに東京へ行けるというのもいい環境だなあって。変に一大決心しなくても、まちと自然を行き来できるんですね。両方が手に入る位置にすることで選択の幅が広がると思います。

オフになったときに、オフでいられる場所。山にもまちにもすぐに行けたりとか。「おいしいとこどり」の幅のある暮らし。そういう距離感が絶妙だなあって」

市内にある7つの児童館
地域で暮らす親子の憩いの場



遊びを中心とした活動を通して、地域の子育て環境づくりの充実化を計ることを目的とした施設。前橋市にも日吉・朝倉・大友・下小出・粕川・ふじみ児童館とふじみ分館の計7館がある。玲奈さんが家族でよく利用するという粕川児童館で話を聞いたところ、全体が広々としたワンフロアになっているため、自由なかけ回る子どもにもよく目が届き、親も安心して遊ばせることができるという利用者から好評。一日80人から100人、多い日には200人ほどの利用があるのだそう。取材中は修理をしていた館内遊具の巨大なトランポリンも、子どもたちには非常に人気があるらしい。遊んでいる子どもや親同士が仲良くなることも多く、地域に住む親子の憩いの場になっている。

問 前橋市保健センター内 子育て施設課
027・220・5706

前橋市移住コンシェルジュは
あなたの夢を応援します。

移住コンシェルジュ
鈴木正知



<https://www.facebook.com/maebashijju/>

Let's Learn 上州弁

ブルーベリー
食べりい。



船津伝次平

解説

上野国原之郷（現在の前橋市富士見町原之郷）の名主を務めながら農業技術の改良に取り組み、西洋の手法も取り入れた「船津農法」を考案。近代の農業技術の発展に貢献した「明治の三老農」の一人。

「食べなさい」「召しあがれ」の意味で日常会話に用いられる。用例としては、優しいトーンで「よかったら食べりい」、厳しいトーンで「早く食べりい！」など。

前橋にある企業の仕事や様々な取り組みを紹介します。
あなたに合った“前橋での働き方”が見えてくるかも!?

ハロー！WORK まえばし

多様な業界で働くママ・パパを応援！

GNホールディングス株式会社

GNホールディングス(株)では、2017年4月、休日保育にも対応した託児所「まいにちほいくえん」をオープン。内閣府の「企業主導型保育事業制度」を市内で初めて活用した同施設では、グループの従業員や同じサービス業で働く地域の子育て世代が働きやすい環境を整えようと、年末年始やGWを除いた休日も預かり保育を実施。「育児休業明けに保育環境があれば職場復帰したいという要望や、保育園に入園できず職場復帰が遅れた女性社員がいるなど、社内でも保育ニーズが顕在化してきた」と話すのは、同社の矢端高広部長。今後についても「サービス業で働いているママとパパが安心して子育てができるように、『まいにちほいくえん』を量・質共に充実させていきます」と話してくれました。



協力 GNホールディングス株式会社
前橋市城東町一丁目6-8

まいにちほいくえん
前橋市総社町一丁目9-31

移住コンシェルジュ便り



全国的に移住を推奨する仕掛けや情報が乱立してくると、「移住(田舎暮らし)ってなんか楽しそう!暮らしが楽になる?家族との時間も増えるかも?」といった漠然とした考えが次々浮かんできて、「我が家も移住を考えようかな?」と思いつご家族が多くいらっしゃると思います。

そこまでは正解!そのイメージは決して間違っていないのですが……ちょっと待って!宣伝広告やPRは素敵でも、その先の受け皿がザルになってしまう地域が少なくありません。ですから移住先を迷った時は、気になる地域に「しっかり準備、しっかり調査、しっかり連携、しっかり段取り」を、一緒になって汗をかいてやってくれる“人”がどれだけいて、繋がれるか?この辺りをよく考えてみてください。

それに実は移住って、自分が思う理想の場所にただ住むだけじゃない。そこで暮らす人たちが暮らしの中で、時間をかけて育てて来た文化そのものに触れ加わることでもあるんです。まずは、自分の理想から一歩引いても、周囲の人たちと寄り添って地域を知り、文化を共有しようとする。そんな姿勢があるだけでも、後の暮らしが大きく変わってくるように思います。

こんな風に、移住を支えてくれる人との縁を見つけて、地域へ入って行く覚悟も出来たら、あとは移住するだけ。自分を信じて、憧れの地に飛び込んでみましょう。もちろん、困った時は移住コンシェルジュに相談して下さいね。

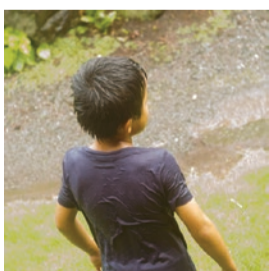
鈴木正知 (すずき まさと)

東京都町田市出身。上野動物園や葛西臨海水族園の飼育員、長野県戸隠市キャンプ場管理人インタープリターなどを経て、2006年に前橋市へ移住。市内23の行政区を集めて地域活動の情報共有をする「前橋地域づくり協議会」や「前橋の地域若者会議」を立ち上げて以来、前橋市の地域づくりに携わる。2015年より、前橋市の移住コンシェルジュに就任。



歩いて帰ろう

川の流れば、様々な記憶を運んでくる。イマの自分、カコの自分、ミライの自分。いま、自分とすれ違った気がした。



Instagram
@susono_maebashi

取材メモ
「移住とは、人生そのもの」という言葉にたどり着いたのは、玲奈さんの取材が終わったあとのことでした。「子育ては広々とした自然あふれるところで」との思いや、前橋が「夫の故郷」であることが、彼女の移住のきっかけ。移住は、大なり小なり人生が動く瞬間なのだろう。であれば、観光PR視点だけでなく、もっと移住者側の感覚を大事にしたメディアづくりができるかと良さそうと思いつき、制作を進めてきました。「おもしろい」と「絶妙なほどほどさ」。こうした言葉が玲奈さんから何度も出てきたのが印象的でした。家の周りに豊かな自然環境がありながら、車を少し走らせれば買い物もできるという今の暮らしが、彼女にはすごくフィットしているそう。ほかに、移住コンシェルジュ・企業の先進事例・若者移住者などのリアルな声や情報をまとめたあります。本誌を通して、前橋移住に縁のある方々に「前橋は暮らし心地のよいまち」だと感じていただければ幸いです! (ライター・竹内羅人)



ユニーク U-29ピ-プル

前橋八幡宮 神職
小泉 互さん(28)

「前橋生まれの愛知県東海市育ちで、移住したのは2016年2月。前橋は母方の実家で、小さい頃によく遊びに来ていました。それがちょうど2年前、こちらの代表宮司が亡くなった時にお話を頂いて。社会人3年目で今後について色々悩む時期でしたが、代々その土地で受け継がれてきたものを守りたいと思い、移住を決めました。普段の主な仕事は、ご祈祷や神社の管理などです。今後はあまり使われていなかった社務所などのスペースを整備して、神社は入りづらいというイメージを変えていきたいですね。前橋は一見、寂しい街に見えるかもしれないけれども、中では新しい活動をしている若い人も沢山いて、踏み込んでみると面白い場所だと思っています」